



但馬水産技術センターだより



漁況情報（G2554号）

令和8年3月11日
兵庫県立農林水産技術総合センター
但馬水産技術センター 発行

令和7年(2025年)漁期のあかいか(ソデイカ)漁況

今漁期（令和7年漁期）のあかいか（ソデイカ）の漁況と関連情報について、別紙資料のとおり取りまとめましたのでお知らせいたします。

お問い合わせ先：兵庫県但馬水産技術センター（担当：中村）

TEL：0796-36-0395 FAX：0796-36-3684

email：nourinc_tajima@pref.hyogo.lg.jp

ホームページ：https://www.hyogo-suigi.jp/tajima/

※ホームページではカラー版を掲載しています

令和7年漁期のあかいか(ソデイカ)漁業について

今漁期(令和7年漁期)のあかいか(ソデイカ)漁業について取りまとめましたのでお知らせします。

1 令和7年(2025年)漁期の漁況

県下全域の漁獲量(速報値)は、**合計 1.2 トン**
(前年は 21.9 トン) で前年の5%、過去10年平均
 の2%でした(図1、表1)。

表1 県下各漁協(支所)の漁獲量(速報値)

	R7年(トン)	R6年(トン)	前年比(%)
但馬漁協津居山支所	0.22	3.37	6.4
但馬漁協竹野支所	0.09	1.57	5.8
但馬漁協柴山支所	0.19	2.88	6.4
但馬漁協香住支所	0.65	12.13	5.4
浜坂漁協	0.06	1.96	3.1
合計	1.20	21.91	5.5

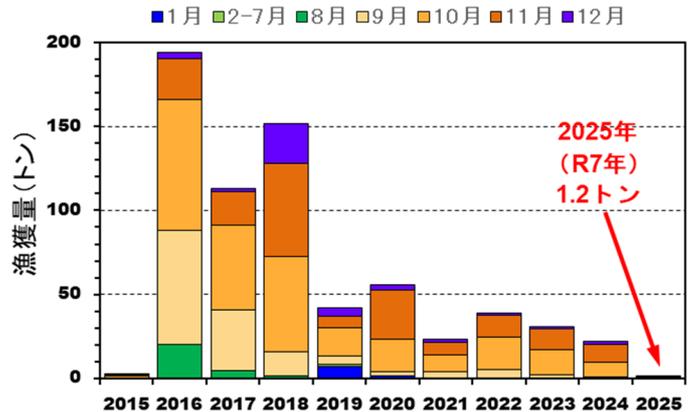


図1 あかいか(ソデイカ)漁獲量の推移(但馬全体)

2 価格の推移

県下全域の漁獲金額(速報値)は、**合計 247 万円**
(前年は 2,857 万円) で前年の9%でした。
 1kgあたりの平均単価は、10月～12月は2,000円前後で推移しました(図2)。

3 令和7年漁期の来遊量指標

来遊量指標としている但馬漁協香住支所の1日1隻あたりの平均漁獲量は3～33kg/日/隻で推移しました(図3)。盛漁期(9～11月)の平均は22kg/日/隻で前年の30%、過去10年平均の22%でした。

なお、今期は漁期を通じて漁獲がない操業も多くみられ、漁獲がない操業(ゼロキャッチ)も含めた1日1隻あたりの平均漁獲量は0～17kg/日/隻(推定値)で推移し、盛漁期(9～11月)の平均は10kg/日/隻(推定値)でした。

漁模様がよい年は概ね主群が成長しながら漁期を通して主な漁獲対象となり、年によっては新たな群れが加入して漁獲対象になりますが、今漁期は11月以降に胴長40cm未満の小型個体も漁獲されており、ごくわずかですが新たな群れの加入があったと考えられます。(図4)。

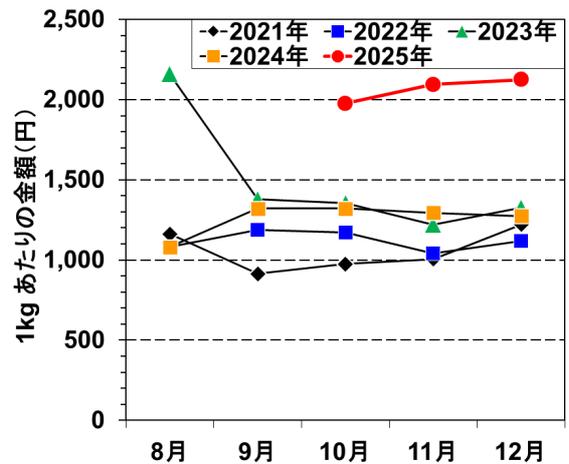


図2 あかいか(ソデイカ)平均単価の推移(但馬全体)

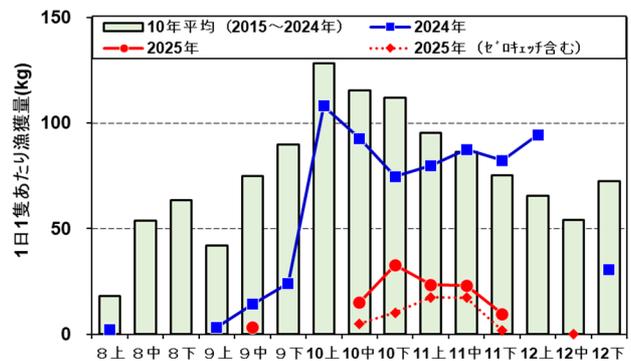


図3 あかいか(ソデイカ)来遊量指標の旬別推移

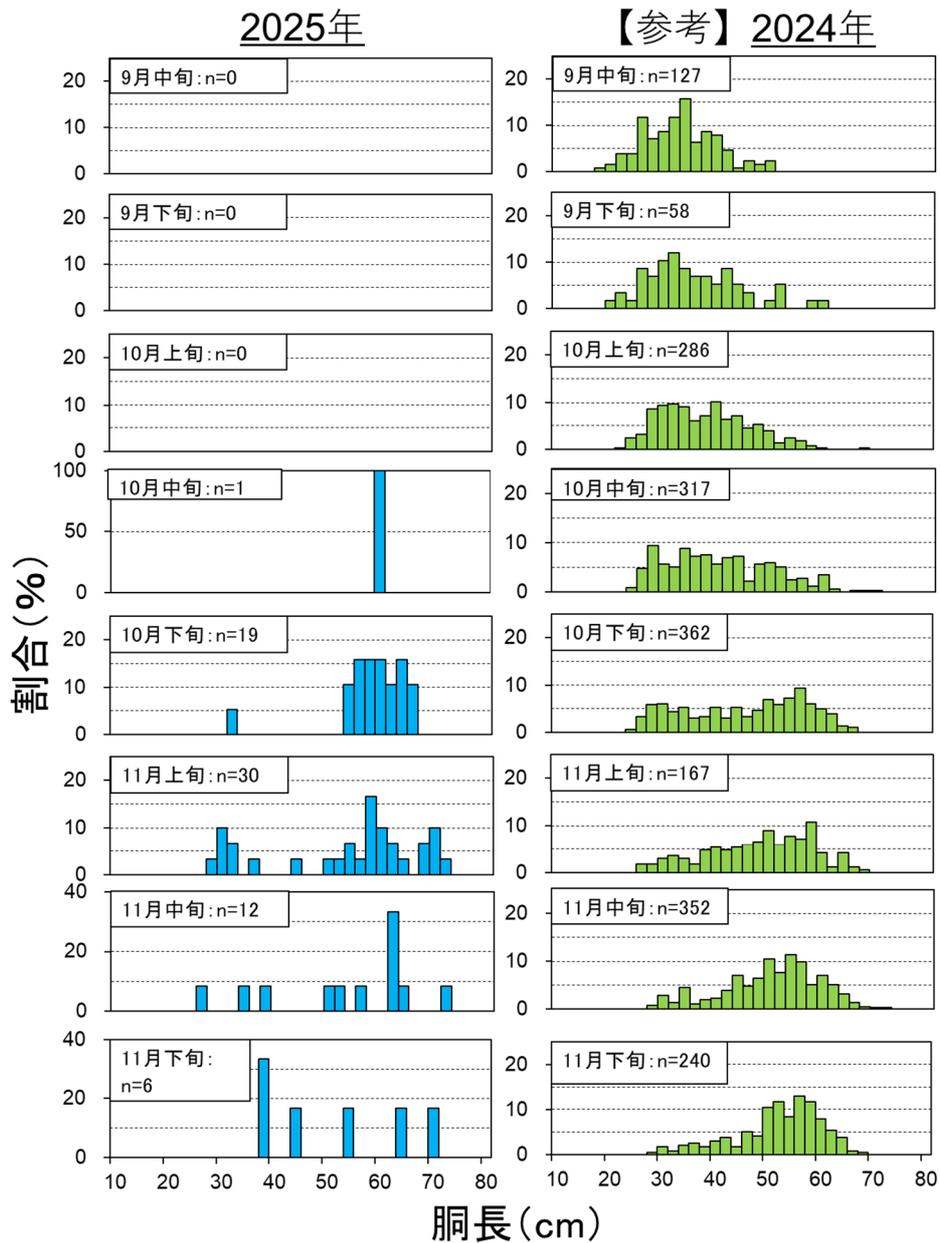


図4 2025年漁期(左図)と2024年漁期(右図)のJF但馬香住支所に水揚げされたあかいか(ソデイカ)の体長組成
 ※nは各旬に測定したあかいか(ソデイカ)の数を示します。

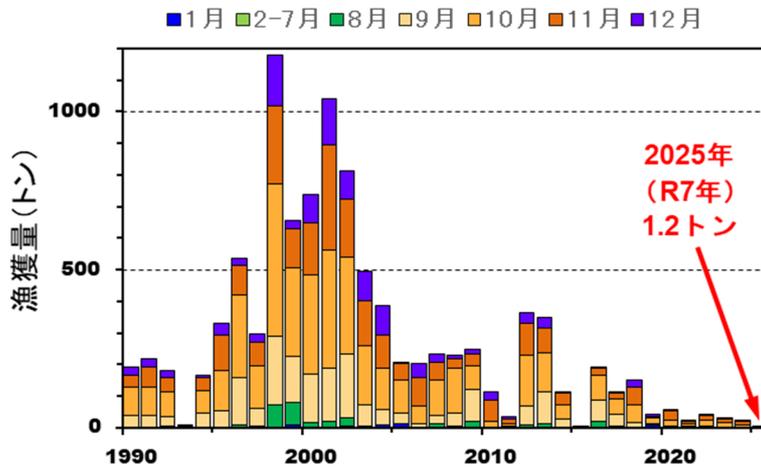


図1の補足図(1990年～2025年) あかいか(ソデイカ)漁獲量の推移(但馬全体)

4 今漁期の漁模様の要因について

① 沖縄県の漁況

日本海で漁獲されるソデイカは、2～3月を盛期とする1～9月に発生し、対馬暖流の上流部から成長しながら来遊してくる資源と考えられています。沖縄県の漁獲量と但馬の来遊水準とは必ずしも一致しませんが、沖縄県で漁獲量が少なかった2010-2011年漁期（平成22年11月～平成23年6月：1,622トン）に対して、2011年の但馬も35トンと低迷した年がありました。

沖縄県の2024-25年漁期（令和6年12月～令和7年5月）の漁獲量は1,475トン（前年漁期比57%、過去10漁期比71%）で、過去10漁期で最も少ない漁獲量でしたが、2025年漁期における本県の漁獲量は1.2トンと非常に低迷しました。

なお、2011年の但馬ではシロイカ（ケンサキイカ）漁に漁獲努力が向いたこともソデイカの漁獲量が少なかった要因の一つと考えられています。

（沖縄県漁獲量：出典 沖縄県水産海洋技術センター、<https://www.pref.okinawa.jp/fish/kenkyu/kankobutu/sodeika.html>）

② 冷夏/エルニーニョ現象

2015年はエルニーニョの影響による冷夏で、対馬海峡から日本海に来遊するソデイカが少なかったと考えられています。また、1993年はエルニーニョ非発生年ですが記録的な冷夏であり、これにより対馬海峡から日本海に来遊するソデイカが少なかったと考えられています。

気象庁の2025年の天候のまとめ（速報）では、日本の年平均気温及び日本近海の平均海面水温はいずれも統計開始以降最も高い値となる見込みであり、エルニーニョ現象は2024年の春以降発生しておらず、エルニーニョ現象もラニーニャ現象も発生していない平常の状態で、冷夏ではなかったことから、その影響はなかったものと考えられます。

（2025年の天候のまとめ：出典 気象庁、https://www.jma.go.jp/jma/press/2512/24b/20251224_2025tenkou.html）

（エルニーニョ：出典 気象庁、http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/data/el_nino/learning/faq/el_nino_table.html）

③ 対馬海峡の環境条件

ソデイカは南方から対馬海峡を通過して日本海へ来遊します。来遊時期と考えられる6月の対馬海峡部の環境条件（水温、潮位等）は、水温が高い、潮位が高い（対馬暖流の流量が多い）ほど来遊量が多い傾向があります。2025年6月の水温はやや低め、潮位（長崎県対馬市厳原験潮所）は平年よりかなり高めでした。また、気象庁の「対馬暖流の勢力の時系列」から2025年6月以降の対馬暖流の勢力は、過去25年平均を大きく下回っていた状態から急激に勢力が強くなり、7月までに過去25年平均を大きく上回る勢力に移行し、その後は勢力が弱まって9月には平均程度まで下がり、10月以降の勢力は再び過去25年平均を大きく超えて推移していました。

これらのことから、日本海への来遊に対する対馬海峡の環境条件は6月以降には好適へと移行したと考えられます。

（験潮データ：出典 海上保安庁海洋情報部 https://www1.kaiho.mlit.go.jp/KAN7/kencyo7/tokei_data/iz_tokei_dt.html）

（対馬暖流の勢力：出典 気象庁、http://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/kaikyo/tsushima/tsushima_area.html）

④ 水温分布

これまでの調査結果から但馬沖の好漁場は水深50mの水温が19℃以上、水深100mの水温が14～15℃以上の海域に形成されることが分かっています。但馬沖の水温分布に影響する冷水域は、8月は北緯36°50'以北を中心に分布していましたが徐々に南下し、11月には隠岐諸島周辺を囲むように冷水域が分布しました。このことからソデイカの分布は沖合へ広がりにくく、沿岸寄りであったと考えられます。

（水温分布：出典 水産教育研究機構、<https://fra-roms.fra.go.jp/fra-roms/public>）

⑤ まとめ

今年度のソデイカ不漁の要因として、沖縄周辺海域においてもソデイカが不漁であったことから、①日本周辺海域のソデイカ資源水準が低かったこと、②日本海への来遊量が極端に少なかったことが挙げられます。特に②について、スルメイカ冬季発生系群の幼生を模擬した粒子生残輸送実験において、東シナ海から日本海ではなく太平洋へ流出する粒子が多かったことが示されており、このことから、発生時期が一部重複するソデイカも日本海へ来遊しにくい環境にあった可能性があります。

ソデイカは南方からの来遊量の影響が大きい資源であり、但馬沖での来遊水準や漁獲量もその影響を大きく受けますが、2019年以降は低調な年が続いています。また、体長組成の推移や加入群の数も年ごとに傾向が大きく違っています。継続してデータを蓄積していくことが重要となりますので、今後も引き続き調査へのご協力をよろしくお願いいたします。